

粵東畚族と漢族客家宗教祭典の比較研究

楊 鶴書[※]

広東省の東部は畚族人の居住地である。彼らは漢族と雑居して、特に客家人との関係が密接で、「畚がいれば、客がいる」と言われるほどである。両者間の物質文化における関係がいままでは多く注目されていたが、精神文化の面、特に宗教信仰の面における相互関係については、あまり注意されていない。本文は両族の宗教祭典について初歩的な比較を行う。

われわれの現地調査と省内の民族学研究者の調査結果に基づき、畚族と客家族の宗教信仰、及びそれぞれの宗教祭典を以下のようにまとめる。

畚族の宗教信仰については、梅州市豊順県鳳坪村（風吹礫）とその隣の潮州市潮安県文祠鎮李工杭村の鳳凰山村の畚族居住者を例とする。その宗教信仰は多元的民間諸神信仰であり、主に人々によく知られている附馬犬頭王の祖先崇拝、歴代の祖先崇拝、道教諸神の玉皇大帝、三清、三天尊、感天大帝、協天大帝、三山国王、三夫人（三婆）及び北帝崇拝がある。私たちが最近知った情報によると、鳳坪村東南の山谷に、昔は北帝廟と木造に金箔をつけた北帝神像があった。廟と神像は解放後もあったが、文革の時に破壊されてしまった。仏教的な信仰は如来、観音菩薩、佛陀、達摩に対する崇拝がある。去年、私達はまた鳳坪村の原始信仰の遺留を知った。例えば、土地崇拝の福主公王（公王）、路頭伯爺（土地伯公）、竜尾爺（土地龍神）、及び竈神、狩猟先祖の崇拝などである。昔は鳳坪村の西北方向の水口に公王廟があり、中に木造の公王像が何個もあり、それぞれ名前もあった。話しによると、招兵を行う時、公王爺を祭り、神像を担いで町に練り出すこともする。これらの神像は文革で壊されて、公王廟は再建された。鳳坪畚族の人は漢族の聖人も祭る。昔、鳳坪畚族の子供は入学する時、まず孔子を祭らなければいけない。解放前の小学校本館に「大成至聖先師孔子」という牌があり、子供が入学する時に、親に連れられてここで線香を燃やして、お礼をする。

梅州各市と県の客家の信仰はだいたい似ている。以下は伝統的な特徴を多数保留している平遠県仁居地区を例にする。当該地域の宗教信仰は全体としては、民間諸神信仰に属する。それは位以下の種類に分けられる。

道教の影響によるもの：

1. 北帝。また真武とも呼ばれる。民間では真武大帝、蕩魔天尊と俗称する。仁居（旧県治）には北帝廟が立てられており、真武神を祭っている。
2. 城皇爺：道教によると、城皇爺は「悪を処罰し、国を守る」神様である。仁居では城皇廟があり、城皇を祭っている。

※中国・中山大学人類博物館教授

3. 張天師：東漢時代の五闢米教の教祖張陵。
4. 七師爺：七人の山に化けた仙人。清の時代の「平遠県志」の中に、こう記載している。
「七仙は黄奮員官石であり、漢時の秀才と言い伝える。雨ごいに効く」と。いまでも山参りする人がいる。
5. 文昌帝君：文昌は道教の神であり、民間においては、とても影響力があり、世の中の声名と利益を管理する神様だから、文人はよく祭る。

仏教の影響による諸神崇拜：

仁和地区には昔、仏教の寺がいくつもあった。祝聖寺、光明寺、石林寺、会慶庵、陵峰寺などがあり、僧や尼が住んでいる。仏教影響を受ける民間諸神は：

1. 観音に対する信仰。観音は仏教諸神の中に民間においてもっとも影響の大きい神様であり、客家族の居住地域も同じである。仁居地区の仏教徒は田圃の間に小さな廟を作り、或いは家のなかに観音の像を置き、奉っている。
2. 南無阿弥陀佛：南無阿弥陀佛は仏教の神でありながら、仏教徒が唱える言葉でもある。しかし、仁居地区では別の意味がある。ある場所で異常な事件（例えばけが人、水死など）が起こった時、災いを避け、佛の保護を求めため、事故現場に近い岩石に、或いは石碑を立てて上に「南無阿弥陀佛」と刻み、保護を求めながら、警告の効用もある。

民間諸神崇拜：

1. 公王。公王は土地の神であり、社神とも呼ばれる。「孝経」にこう書かれている。「社は土地の主である。土地は広く、すべて奉るのは困難で、社にして奉る。」。公王は仁王地域の最大の土地神であり、管理する地域は一つから十数の自然村にわたる。普通は石と位牌の形にして、露天もあるし、正方形の小さな廟を作るのは多い。仁居の住民は公王を祭るのは年に二回あり、春は福を祈り、冬は感謝である。
2. 伯公。小さな区域或いは道を管理する土地神である。路上の岩石や、木の形をとっている。例えば、田圃を守る木のしたに伯公を置いて、「田伯公」と呼ぶ。
3. 家内後土神。仁居では、竈神をあまり重視しないが、家屋の土地神を相当重視している。客間の左側の上に置き、「本宅土地龍神の位」と書く。屋敷の土地竜脈の神として祭られる。
4. 門神。仁居地区の門神は神荼と郁垒と秦瓊と尉遲恭の四人を奉る。門神像を貼らない家もあるが、初一と十五の火にドアの前で線香を燃やすだけである。
5. 祖先崇拜。仁居地区の祖先崇拜は自身と所属する族の共同認識と関係するから、特に重視されている。姓ごとに祖先を奉る祖祠があり、中に歴代の先祖の位牌を置いており、ほかにまた歴代の先祖の墓地もある。普通は春に祖先のお墓を参り、冬に祖祠で祖先の位牌を奉る。屋敷ごとに祖先の棚があり、「**堂上*氏歴代祖考之神位」と書く。
6. 蒼頡神。民間伝説によると、漢字は蒼頡という人が作ったもので、知識を大事にする客家

人はこの神をととても尊敬している。学校と市場の近くに小さな廟が作られている。

7. 忠誠な人物に対する崇拜。客家人は歴史上に何回も国家の破滅を経験して、亡命の苦を味わっていたから、国家に忠を尽くし、庶民を助ける人物をととても大事にしている。このような人物のために廟を建てて奉ることがよくある（中に時代と階級の制限によるものもある）。仁居地区で大事に奉られているのは：孔廟、孔子を奉る。関帝廟、関羽を奉る。岳王廟、岳飛を奉る。三相公祠、文天祥、陸秀夫と宋帝を奉る。程、李二公祠、梅州の聖人平遠人程と明代万歴年間平遠県の県令李允懋を奉る。愈公祠、倭人を追い出した將軍愈大猷を奉る。

仁居では昔、カトリック、キリスト教の伝播もあったが、影響は少ない。

以上のような諸神崇拜があるから、二つの民族の間には、毎年或いは何年に一回、相当の規模の大きい、高額な費用をかける祭典を行う。この祭典は、該当地域の神様を祭る公共儀式でもある。粵東畚族の一番重要な祭典は「招兵」であり、客家人の区域的な公共儀式は「建礁」である。

畚族の招兵儀礼については、私達が鳳坪村で調査した結果と朱洪、馬建剣の1994年12月に李工坑村に対する調査により、以下のようにまとまる。

招兵は自然村を単位に行う。豊順県では鳳坪村を単位にして、潮安は李工坑村を単位とする。「招兵」はいままでは、3、5年間に一回行い、時間は春節前の冬至前後の間であり、吉日を選ばなければならない。

準備過程は以下のとおり：まず、村中から何人かを員首（理事）に選ぶ。次は各家に集金する。金額は人口数に割り当てて分担する。（去年の李工坑村の招兵用費用は民族、文化、旅行部門がスポンサーであった。そして法師を招いて吉日を選ぶ。後は各地の親友に知らせ、劇団を招いて劇を上演させる。

吉日の前に儀礼を行う場所を飾る。特に神局を丹念に飾る。場所は本姓祠堂にする。祠堂の前に三角型の竜旗を立てて、招兵儀礼の標識とする。神局は祠堂の正面に置き、宗教の法師が飾りをする。部屋の中央に机を二つ置き、上に神壇を置く。神壇の上に「閩山法院」と書いて、法師は道教閩山教派の門人という意味を表す。神棚の両側には「王母驅邪迎百福、閩山斷案集千祥」という対句が書かれている。祭る神の中に一番重要なのは玉皇靈符神牌で、次は如来仏像である。左側は青竜北帝で、合郷各家の慈悲神牌を建てるが、右側は右鎮財丁で、五海四竜の神牌と境内各郷の福主公王神牌を建てる。神壇の前に、精進式の供えもの、お茶、盃、号角、木魚、銅鐸、「太上老君勅」と書く銅印、法器、お経などを置く。神棚の後ろに各式の表と符録を置く。部屋の後ろと回りの壁に布の神像を掛けているが、主に民間の諸神の像である。祠堂の前に3つの机を二階に重ねて、招兵台とする。

招兵儀礼を以下の5つのステップで行う。

1. 起師・神を招く、文書を送る。

12月24日の深夜7時に太鼓を打つ、「起師」という。法事が始まり、太鼓の音が天まで届き、神壇の前は蠟燭が燃えて、明るくなり、線香も燃やす。法事を担当する法師は青色の服を着て、黒い布を頭に纏い、帽子に老君、三清像があり、竜角を吹いて、客家族の言葉で神位順に丁寧

道教、仏教の神を迎える。道教の神が多くて、主に玉皇大帝、三清、三天尊、王母娘娘、三夫人及び諸神、將軍がある。そして、本尊の法師先輩を迎える。

道教の神を迎えてから、仏教の神を迎える。仏教の服装を着る法師が登場する。彼も客家族の言葉でお経を挙げたり、木魚と銅鐸を叩き、如来、仏陀、達摩、僧伽耶などを迎える。礼仏、法、僧三宝、陳三妹（道教師）も混じっている。

以上の道教、仏教の神を迎えるたび、紙を燃やして、杯を投げて、陰陽の対になったら、神がもう迎えられてきたということで、角を吹き、太鼓を叩き、紙で作られて馬、服、金などを燃やす。儀礼は複雑で、非常に時間がかかる。

神を迎えてきたら、神に「表」を挙げる。道教の服を着る者は担当し、「表」を唱えて、神に「信者を守り、一族は旺盛、富貴、農業は豊穡で、災害がない」ことを祈るなどの内容である。信者が招兵儀礼を行うことの願望と、これをやることによって、心理的な平安を獲得することを現れている。

2. 本福主を招き、神を安置する。

翌日の朝8時-10時の間に、法師は道教の服を着て、銅鐸、盃などを持ち、理事（員首）が十数人の若者を連れて、御神輿を担いで、村内のあちこちに奉られている神の香炉を御輿の中に入れて、祠堂まで担いできて、左側の神壇に置く。それらの神は感恩大帝、協天大帝、三山国王、福主公王、路頭伯爺、狩獵先師、竜尾爺などである。また「本境各宮福主公王神位」と「公王福主宝千」経を挙げる。

次は「安竜」儀礼である。祠堂内の神壇の前に円形の大きな笊を置き、中に十数キロのお米を入れて、竜の形にする。赤い布で竜の角を作り、曲げている枝で竜の鬚を、二つの卵で目を作る。担当の法事は「安竜鎮宅八場経」と「北闘施竜王経」を読んで、74人の竜王、18人の星君、東西南北中の五岳聖帝を迎える。そして法師は法器を持って、一人の理事と何人かの若者に連れられて、家鴨（水の道を象徴する）を持って、祠堂の後ろに約500メートル離れている所の丘にある竜神の神位前に行って、線香と蠟燭を燃やして、供え物を並べてお祈りをしてから、別の道で祠堂に戻ってくる。そこで「安竜」が終わる。この儀礼は各本家の福主・龍神を祭る儀礼であり、土地崇拝の一種とも思える。

3. 田の神を祭る。「安竜」と「安井」。

翌日の午後、家ごとに机を持ってきて、祠堂の前の本境福主衆神の前に並べて、上に鳥・豚・魚、果物、などを置き、各家の主婦が線香を燃やして、順番に神主の前で礼拝をする。

担当の法師は仏教の服を着て本境福主神の前に田の神を祭って、竈の神を鎮める。「消災経文」、「福主公王宝千」、「仏説黄虫経」を挙げる。これは田の神と竈の神を祭ることである。

いままでの「安竜」の法事は各家ごとに行うが、去年の法事は一緒に行った。そして、「普庵勅令安竜吉利神符」・「勅令臨水正治護身保命消災符」・「仏普庵吉符」・「勅令安吉符」が書

かかれている赤い紙に「太上老君勅」の印を押して各家に配って貼る。符をもらう人は2, 3, 5元のお金を礼として送る。ここに二点注意すべき所がある。一つは儀礼の中心は女性であり、もう一つは符をもらう人が多くて、外の人間がもらいに来的場合もある。畚族女性の家の中での地位と人々が家庭を大事にすることが想像できる。

次に道教の服を着る法師はみんなを連れて、村内の一番古い井に行って「安井」法事をする。

4. 招兵

夜になっても続いて法事を行う。災いを消滅する法事を行ってから、道教の服を着る法師は担当して「招兵」を行う。

招兵儀礼を祠堂の前にある招兵台で行う。台の左側に米と塩をたくさん担いでいる主婦が集まっていて、兵隊用の食糧を送る行列である。右側に9名の若者が立っており、オレンジ色の服を着て武士の格好をする、兵を迎える行列である。

招兵法事は3人の法師が順番に行う。司会者は角を吹いて太鼓を叩き、「請神招兵一道教」を読む。附馬王をまず迎えて祖先を祭り、そして玉皇大帝、三清、太上五靈老君、王母娘娘、閩山真君、福州陳・林、李三婆などの神を迎える。一人の法師は左手に九面旗、右手に盃を持ち、3つの机で重なって作られた二階の招兵台に立ち、足は米をいっぱい入れた人物に立つ。ほかの二人の法師は一人が一階の机に立ち、もう一人は地面に立ち、三人は階段のように並ぶ。武士の格好をしている若者はそばに立つ。一番高い所に立つ法師は旗を振る。その旗は各色の色紙で作られ、長さはやく一尺半で、広さは一尺ぐらいある。旗の縁は歯のように切られて、竹の枝で幹が作られる。

九つの兵隊を招くが、それは以下のように分けられている。東方九夷兵・青旗、南方八蛮兵・赤旗、西方六戎兵左・白旗、北方五狄兵・黒旗、中央三秦兵・黄旗。左右両側に左當天生兵・水色旗、右當地生兵・黄旗がある。本壇法主（村内で壇をつくったことのある先祖法師）は白旗で、本地の福主は赤旗である。以上の順序で担当の法師は各兵隊の名前を呼び、盃を投げる。陰と陽の対になるなら、招きに答えたということになり、法師は旗を放り出して、武士がそれを受け取って、太鼓を叩きながら、みんなに囲まれて神壇を回り、旗を米入りの容器に刺す。このように9回も繰り返して、全部の兵隊を揃えるまで儀礼が行われる。そして、法師は祠内の壇前に「安兵」法事を行う。法師は9の旗を刺している米入りを中央の大きい笊に移り、主婦たちは米と塩を担いで祠に入り、庁内に置く。法師は米をつきながら、「謹請閩山門下給糧米下發衆兵」と呼ぶ。招兵は法事の高潮であり、雰囲気は非常に熱熱になる。

5. 神を送り、お礼を云う。

招兵が終わったら、法事は勸善に入る。法師は仏教の服を着て、「大慈大悲勸善經」を唱える。そして神を送り、お礼を云う。迎えてきた諸神、先祖、本壇法祖、本村福主をいちいち送って、道教の服を着る法師は「上屋奏表」、「普庵祖師光灯謝土真經」を読みながら踊る。三日目の朝に、

全部の法事は終わる。

客家の諸神を祭る儀礼 — 建礁については、同じように平遠仁居地区を例として考査する。

昔、境内の仏教徒は名の知らない死者を集めて義塚に埋葬して、「歴壇」と呼ぶ。毎年陰暦7月15日に「歴壇」内で線香や、紙の洋服を燃やして、食事を供えて無縁仏を祭る。そして酒や、食事などを村はずれの道ばたに置いて、「度孤」という。「度孤」に使う食物は回収せずに乞食に食べさせる。この儀式は簡潔化した「水陸道場」でもあり、仏教の儀式である。度孤と関連して、規模の大きい物は、仁居地区においては、建礁である。中国北部では建礁は道士が法事を行うことを指すが、ここでは和尚が担当する。建礁の儀式は大きい場合と小さい場合があって、大きいのは県内で行うもので、城皇廟にあり、県礁と呼ぶ。3年連続に行ってから、3年間停止して、このように繰り返す。中等なのは郷礁である。小さいのは村レベルの礁である。黄畜古丁の礁壇は古丁虚にあり、五福村の礁壇は五福下貝にあり、東嶺村（現在の井下村）のは野湖坪にある。仁居の麻楼村にも礁壇がある。現在、仁居鎮には五つの礁壇があり、6つの社に分けられている。頭社は仁居虚に、二社は城南、三社は飛龍に、四社は東嶺、五社は五福、六社は麻楼にある。以下、建礁の過程を簡単に述べる。

建礁前に、まず地方で経理（員首）若干名と総経理一名を選んで、準備を任せる。彼らはまた知識のある能力者を頼んで帳簿を管理する。

建礁の経費は以下の出所がある。

1. 各家の寄付。他の善心者の寄付。一人を指定して、帳簿を管理する。
2. 寄付がある程度金額になると員首と呼ぶ。員首は壇に入って線香を燃やしたり、経を読むことができる。
3. 塾員。礁壇の経費不足部分を負担する人である。建礁の経費の中の不足する部分は塾員の人数分で分担する。

建礁を行う時期は秋の収穫以後で、だいたい陰暦10月に多い。田舎の礁壇は広い処にあり、木の板や柱で作られる。真ん中に高い台を作り、仏像を掛けて、和尚の経を読む処になる。両側には一階建ての部屋があり、それぞれ玉皇大帝、三清、城皇、閔帝、三相公爺、仙人叔婆を入れる。その他に、総経理と帳簿管理室、演奏室（八音亭）、台所がある。高い台に向かって、壇門が作られ、門外に紙で作られた高さ5メートルぐらいの「三大人」と、地方神（2メートルぐらい）が一人ずつ立てられる。また新しい竹で作られる竿があり、高さ10メートルぐらいで、上に天官賜福神像と仙女騎鶴像が掛けられる。壇の玄関と台にそれぞれ対句が書かれている。玄関の対句は「壇開八面、縁結万人」であり、台に書かれる長い対句は「憫衆魂之無依、建此耗、設此耗、放胆前来、莫向寒雲啼夜月；惜孤魂之乏祭、施衣、施食、歡心散去、都従苦海渡慈航」である。人々は建礁を行うことによって、孤独な魂を彼岸に送り、災いを避けるように期待している。

建礁の過程：

参加者は建礁が始まる時から入場し、帳簿管理者が統一的に安配する。和尚は左手に銅鐸を持

ち、右手に佛坐を持って、壇に登って、日夜続けてお経を読む。各員首は礼服を着て壇の前に礼拝をし、朝昼晩三回で、各神壇の前に線香を燃やす。三日間、全員は精進料理を食べる。人形劇団を招いて毎晩劇を上演させて、みんなで遊ぶ。三日目の午後から、「放水灯」を行う。壇に祭られている銅佛を取って、総経理が持ち、太鼓や、旗などを持つ行列に導かれる。銅佛を持つ総経理と紙で作られた船灯を持つ員首が真ん中において、人々は後ろについて各村を回る。そして川に沿って水灯籠を流す処に行き、付近の空き地に止まる。水灯籠を流す地点は差干河にあり、各社は範囲を分けて、境界を越えてはいけない。放水灯は紙の船灯籠に蠟燭を付けて、火を付けて水に流すことであるが、一瞬に河に何十の灯籠が水に流れて、きれいである。灯籠を流してから、赤と青の鯉を河に入れて、「放生」を行う。放灯の目的は災いを駆除して、魂を送ることである。夜に人形劇団は一番得意な劇を上演して、また花灯籠を燃やしたりして、雰囲気は頂点に達する。夜半から、「三大人」と地方神を燃やして、孤魂に紙の服や金を燃やして送り、料理を地面に捨てる。そして、牛や豚を殺して翌日の神に供える料理を準備する。翌日の朝、各神にお礼を言って、壇内で仕事をした人は全員席に入って食事をし、食事が終わったら解散して、建齋が終わる。

以上の過程から見られるように、祭典は神話伝説の再現である。それは地域的、大衆的な、歓楽と神秘感に満ちた儀礼でもある。二つの民族の儀礼を比較してみたら、以下の考えが得られる。

1. 二つの祭典はともに道教に起源する。

畚族の招兵儀式については、「祖図」序言—「鳳坪畚族藍氏祖図附馬出身図記」の中に、盤瓠が道教を信仰して「茅山学法」の物語もある。招兵の過程に閩山法院を作り、閩山真君、三夫人などを招いて9つの兵馬を迎えることもある。特に主に五營の兵馬を迎えることから見れば、この儀礼はじつは江南地方の道教から発展した、シャーマニズム的な教派閩山教の「調營」から発展したものと分かる。閩山教には真君を法主にして、三婆教と法主公教に分けられる。三婆教の方が盛んである。三婆教は福建省福州から発生して陳靖姑（臨水夫人）及び義理の姉妹林九娘（林沙娘とも呼ばれる）と李三娘（李三妹、李三姉とも呼ばれる）三人を祭るから、三婆と三夫人の称号もある。陳靖姑は閩山真君から法力を学び、とても力が強くて、妖怪を駆除して、人々を守る。彼女に関する伝説は民間に広く伝えられて教主に祭られる。

法主公教は福建永春州から発生して、泉州に広く伝わる。符冊によると、閩山真君は法主で、普庵佛を教主にしている。実際には五營兵の東營の將軍張聖君（張聖者）を守護神にして、閩山法王にして法王公と呼ばれる。主な法事は請神、送煞、消災、課誦、調營がある。特に調營は重んじられ、五營の神の兵士を迎えて災いを駆除することを得意としている。その教派系統は：

閩山教（許真君） [三婆教（臨水夫人）—福建
法主公教（張聖君）—泉州

閩山教派はシャーマニズム的な団体で、明確な教義がない。主に巫術や法事を二を持って福建省の福州、泉州、漳州と広東の潮州に広がり、後に台湾に伝わる。

法主公教派が調達する天界の五營兵将は：東營張聖者、南營肖聖者、西營劉聖者、北營連聖者、中營李聖者であり、様々な手の形が配合される。（劉枝万「中国民間信仰」台北 1974年）

畚族の居住地は歴史上では潮州であった。彼らは閩山教法主公教派の五營調達法事を借りて、本族の神話をつけ加えて祭典を構成した。つまり、昔、先祖盤瓠は高辛帝のために蕃族の叛乱を鎮めるために戦い、海を渡る時に危険な状況になり、その時は神兵の助けを得て蕃王を滅ぼした。そして附馬王という称号を得て、姫と結婚をして、今の盤・藍・雷・鐘の4族の子孫を育てた。招兵はこの物語をエピソードにして、九營兵を迎えて五營兵を主とする法事を作り出した。さらに仏教の影響を受けて、仏教の服を着る法師とか、仏教の神を祭る場面も登場した。

客家族の建礁儀礼は中国の道教から起源した、大昔の多神祭祀儀礼である。例えば宋玉の書かれた「高唐賦」の中に「礁諸神，礼太乙。」とあり、李善の注には「礁，祭り也」と解釈されていた。(梁，昭明太子：「文選」巻19賦)

「隋書，経籍志，道経」：「夜中世 星辰之下，陳設酒似舖，餅餌，弊物，歴祀天皇，太乙，祀五星列宿，為書如上章之以奏之，名為礁。」(唐，魏 等編「隋書」巻35)

明，張自烈選：「正字通」酋集下：「凡僧道設壇祈禱曰礁」

唐，宋以降の仏教にも小のような見方がある。唐・玄 選：「甄正論」：「礁者祭之別名」。(「大藏経」52冊 史伝部4)

以上からみれば、建礁は地方的な民間の神を祭る大規模な祭典である。この祭典は道教に起源するが、後ほど仏教に吸い込まれて、現在仏、道が共同で法事を行うことになった。平遠仁居では近世になると、道教が衰弱したから、和尚が主事することになったが、道教の神も祭る。

2. 畚族宗教と漢族宗教文化の結合過程が見られる。形式からみれば招兵は漢族の建礁と非常に似ている。招兵儀礼の準備、資金調達、結壇、請神、法事、僧・道の装束、招兵儀礼の内容は災いを避けて福を招き、経文の内容にある孤魂救済、勸善は漢族の建礁と非常に似ている。九營の兵士を迎える儀礼は閩山教からであり、儀礼の中に使う言葉も客家族の言葉を使うことから、漢族の影響力も見られる。もちろん、畚族の宗教儀礼の中に、自己の宗教信仰の特色を守っており、先祖附馬王盤瓠を信仰することを主としている。閩山教の法事については、全く写すことなく、自己の神話内容を加えて改造し、再創作をして、九營の兵馬を迎えるように完成した。二つの民族の宗教文化の融合過程及び二者の緊密な関係が見られる。

3. 二つの宗教祭典の機能が違う。漢族客家人の建礁は社区を単位にして、区域内の団結力を強める意味があったが、費用が大きすぎて、人々の負担を掛けて結局經理たちの地位を高めて、本来の意味と違ってしまった。畚族の招兵は村と姓を単位にして(鳳坪藍姓，李工杭村の雷姓)，血縁を主にしている。宗族と民族の団結力を強める機能がある。祭典儀礼の中に「兵舞」があり、「先祖を迎える」儀礼の中に法名，郎名を付ける事実もあるから、原始時代の子供と母親・権力・竈が分立するときの成人儀礼の残りだと考える。「安竈」は成人したことを意味して、独立して家庭を作り、家庭と社会責任を負うことを意味する。だから、畚族の祭典の中にいまでも「安竈」を非常に重視している。これは成人式と成家式を合わせて祝うことであり、社会化機能を果たし

ている。

4. 二つの祭典の意義が違う。建礮と招兵はともに神話の再見である。招兵は始終附馬王盤瓠祖先の物語を基礎にして、本民族は国に功労があり、国土に生存と発展の権利があると主張する。と同時に蕃王の叛乱を鎮める時に天からの兵馬の助けを得たことを強調する。これらの天からの兵馬は：東方九夷兵，南方八蛮兵，北方五狄兵，中央三秦（漢）兵であるから，困難の時に他の兄弟民族の助けを得たことを暗喩している。此の恩を忘れてはいけないから，毎回の招兵には必ず迎えるようにする。ここには民族団結の意味がある。招兵儀礼は本民族の存在と発展を強調し，民族団結を強めるから，儀礼の繰り返しにより，この観念が増強される。筆者はこれが畚族の招兵儀礼の優秀な核であり，伝統文化の精華でもあるから，継承すべきだと考える。しかし，招兵の中にも迷信の部分が多い。だから，招兵儀礼に対しては深く研究し，改造を行って，継承して発揚する必要がある。客家人の建礮は何千年の封建迷信を宣伝して，各偽造の神や，鬼を崇拜し，すでに祖先崇拜と脱落している。紙細工や，焼花，人形劇は保存すべきで，独自の発展を歩むべきであるが，人々の思想に対しては，マイナスな影響が大きく，財力の損失も大きいから，廃棄すべきである。

（本研究は国家教育委員会人文・社会科学「八五」計画の助成を得た。）

一九九五年八月

参考資料：

1. 楊鶴書・陳淑廉：「粵東畚族与漢族客家人宗教信仰綜合調査報告」（梅州部分）
国家教委社会科学85計画研究項目（未刊）
2. 朱洪・馬建剣：「李工杭招兵節活動紀要」『広東民族研究論叢』第7期
3. 任繼愈主編：『中国道教史』上海人民出版社1990版
4. 劉枝万：『中国民間信仰論集』台北1974年出版
5. 楊鶴書・譚斌：「平遠仁居地区客家人の宗教信仰」、『嶺南文史』1994年第1期

翻訳：毛淑華（筑波大学大学院地域研究研究科）